
夢か現実か??

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢か現実か??

【Nコード】

N6105Y

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

何故か異世界に呼ばれた私は何故か魔王を倒してほしいと懇願されまあ自分にできるのならと 頑張ってみる主人公南涼（女、15歳）

主人公は現実世界で嫌なことがあり異世界で現実逃避することになりました。

第一話

夢を見ていた。とても楽しい夢。心がとてもあたたかく満たされるような夢を。だからこそ目覚めた時まだこれは夢なのかと思った。でもそんな私の考えを誰かが否定した。

「いいえこれは夢ではありませんまもなくお迎えがきます。起きてください」

優しい声に誘われるように私の意識は覚醒した。

目が覚めた私は回りの異変に気が付いた。回りが緑だらけいつの間に私の部屋はジャングルになってしまったのか。

たしか昨日はいろいろあって早々とベットに横になるなり寝入ってしまったのだ。なんだこれはとかなり私は混乱してしまった。

そんな私にまた誰かが優しく話しかけた。

「大丈夫です。時期に人が来ます。くわしい話しはその方達に聞いてください」

その声が聞こえてまもなく人の話し声が聞こえてきた。

第二話

「もう、なんでこんな森の中に召喚されてるのよ」

「しょうがないでしょ巫女様がちよつと失敗したらしいのですから」

そんな声とともに私の前には三人の男女があらわれた。そんな三人に驚いて固まってしまった私にどんどん近くにやってきた。

「大丈夫ですか？急な召喚でどこかお怪我をしたり気分が悪くなったりしていませんか？」

「いえ、気分が悪くなったり怪我なんかしていないんだけど。いたいここはどこなんでしょ？」

私の頭の許容範囲はもはやいっぱいいっぱいだと訴えているように酷い頭痛がしていた。

第三話

「ここはシルバー王国といって女王フリージア様が治めるくにです。あなたは理由あってこの国に召喚されたのです。」

なんだこの小説みたいな展開は。まさか魔王を倒す勇者にでもなれというんじゃないだろうか。そんなことごめんだな。ただでさえ面倒くさいのはきらいなんだ。そんなことやってるか。

「あのすいません。どうかなされましたか？やはり気分が悪いのでしょうか？」

私はその声で正気に戻った。とにかく現状把握が必要だと考えた。

「あの、いったい何故私とその巫女様に召喚されたのでしょうか？」

「その事につきましても詳しくお話したいと思いますのでとりあえずお城のほうに参りましょう」

「そうよ、いつまでこんな森にいらなくてはならないのよ」

なんだこの女は急に大きな声をだしてイライラして更年期か？

急に女に睨まれたので私はいそいで視線を優しくそうな青年に向けた。

第四話

「さあ、お城のほうに参りましょう。あつ、その前に自己紹介をしましょうか？私の名前はレイチェル・クライス、どうか気安くレイとお呼びください」

「わかりました。レイと呼ばせていただきます。えっと、私の名前は南涼です。涼とよんでください」

そういつて私はぺこりと頭を下げた。

「わかりました。涼と呼ばせていただきます。」

そして、私は視線をあの女の人に向けた。

「私はフランチェスカ・クラウンよ。フラン様と呼びなさい」

「こら、なにをいつてるんですか。涼、フランでかまいませんからね」

私はいったいどっちで呼ぶべきなのかと考えたけど呼ぶ時に考えようと考えるのをやめた。

そして、私はレイの後ろに隠れていた女の子に目を向けた。

第五話

私の視線に気が付いたのかその少女は前にでてきた。

「私の名前はステファニー・シルバーです。シルバー王国の第4皇女です。どうかステフとお呼びください」

彼女は小さいながらも優雅に私に自己紹介をしてくれた。私に彼女と同じぐらいの妹がいるのでなんだかとても可愛く思えてきた。

「それではさっそくお城の方へ参りましょうか。すぐ近くですので。」

私は彼ら三人の後をついてこの森を抜けいく。レイが言うように森を抜けると目の前にはかなり大きなお城があった。

「さあ、涼お城についてとりあえず着替えてそれがすんで女王と謁見してもらいます」

「はあ、なんだかめんどうだよ。どうしても会わないといけないの?」

「お会いしてもらわないとこれから先どうするかが決まりませんから。勝手なお願いになるんですが、涼にはぜひともやっていただかなければいけないことがあるんですよ」

「ああ、もう早く城にいくよ」

フランが1人でどんどん先にいくので私達はいそいで彼女を追いか

けた。

第六話

お城についた私はフランに連れられて大きな部屋にやってきた。そこには、たくさんのメイドさんとドレスが並んでいた。

「さて、涼はドレスで好きな色や形とか あるの？ あるなら言っちゃおうだい」

ドレスなんて無理だ、そもそもスカートが嫌いなものだから。向こうの世界で通っていた学校の制服だって無理やりズボンに代えさせたぐらいなのだから。

「いや、そもそもスカートみたいな、ドレスなんて無理。着るならあの人みたいなのがいい」

そうやって私はドアの近くに立っている人を指差した。その人は何故かびっくりしていたけど。

「なに言ってるのよそんなの無理に決まってるでしょ ！！」

「なら私はこのままでいい。ぜったいあんなの着ないからね」

なんなのよ、女の子ならこんなキラキラしたドレスに憧れたりするもんじゃないの。まあ私も興味ないんだけど。さて、どうしたものかね。

「あの、フラン様どうしましょうか？」

「そうね、さすがにあのままというのはいけないからとりあえず近

衛の正装一式を用意して。時間がないからいそいで」

「わかりました。」

メイドが一礼して去っていった。

「涼、とりあえず近衛の正装一式を揃えてもらってるからそれに着替えなさい。まったくわがまま言って困らせないで欲しいわ」

「人にはそれぞれ好みがあるんだからしかたがないでしょ」

まったく、私が悪いみたいに言わないで欲しいよ。

第七話

しばらく部屋でまっっていると、さっき出ていったメイドさんたちが新たな服を持って部屋にはいつてきた。

「フラン様、これで用意が整いましたので準備にかかってよろしいでしょうか？」

「いいわよ。時間もないことだからさっさとやってちょうだい」

なんだか訳のわからないうちに話が進んでいった。まあ、こんな服を着たことがないのでメイドさんたちにまかせることにした。

「それでは、涼さまお着替えを手伝わせていただきます。」

そう言ってメイドさんに促されるがままに着替えていった。

なんとというか自分でいうのもどうかと思うけど、結構似合っていると
思う。

父親似で、どこか男顔なのでなおさらだ。

これなら女性からかなりもてそうだよ。

第八話

「あら、以外と似合ってるのね。ちょっと私のタイプかしら」

「もう少しフランが若かったら考えるんだけど。ちょっと年齢オーバーかな」

たしかにフランは綺麗なんだけど私は綺麗より可愛いがすきなんだよね。何故か昔から好きになるのは女の子ばかりなんだ。家族にもいってないんだけどね。

などと考えてると背筋が凍るような視線を感じすぐさま振り向くとそこには、顔を般若のごとく歪めたフランが立っていた。

いったい、どうして？何か言った？とにかくそんなに怒ってる理由を聞かないと。

「えっと、フラン様はどうしてそのように怒っていらっしゃるのでしょうか？」

「あら、さっきの自分の発言に私を怒らせる理由があるのだけど、思いつかないかしら？」

さっき、私はなにを言った。無意識に言ったことなんだよね。たしか、タイプだと言ったフランに年齢オーバーで駄目って言ったんだよね。

あっ、そっか、女性に年齢の話は禁句なんだった。何処の世界に

行ってもそれは同じなんだなと深く思いつつ、さて、フランの対処方法を考えないと。

第九話

さて、どうしようかな。たいして考えないで言ったのが間違いだったよな。これからは気を付けないと。

「フラン、別にフランが若くないってことじゃないんだよ。フランは、ホントに綺麗でそれで、えっと……」

やばい、言葉が浮かんでこない。いつもならスラスラ言い訳なんて出来るのに。なんか調子が狂ってるな。

「まったく、もういいわよ。それよりも、女王様を待たせるわけにいかないんだから、早く行くわよ」

フランはさっさと部屋を出ていったので、私はいそいでメイドさんに礼をいってフランの後を追いかけた。

しばらく、かなり輝かしい廊下をあるきながら私がきよろきよと見ているとあっという間に謁見の間についてしまった。

「いい、女王様に失礼のないように気を付けるのよ。さっきみたいに年齢の話なんてしないのよ。できるだけ、敬語ではなさないよ。」

「わかった、やれるだけやってみます。」

ビシッと私はフランに敬礼した。

大丈夫なのかしらこの子はちょっと素直すぎるのが心配なのよね。
でも、まあなるようにしかならないかと思ひ私はドアを開けた。

第十話

フランの後に続き私も部屋に入っていた。玉座にはとても、綺麗な女の人が座ってこっちを見ていた。

その女王の両端には六人の女の子がすわっていた。森であったあの女の子もいた。

「女王様、今回召喚された勇者を連れてきました」

「お疲れ様、フレア。朝も早くからわるかったわね」

「いえ、これは国のためですから。」

なんとなく私は何していいのかわからず、あちこちに視線を泳がせていたら急に女王様が話しかけてきて、ちょっとビックリした。

「まあ、とりあえずは自己紹介から始めましょうか」

第十一話

「まず、私からさせてもらいましょうか。」

私がこの国の女王、フリージア・シルバーだ。私が巫女に頼んでこの国を救うであろう勇者を召喚してもらった。」

えっ、ならこのめんどくさい事態はこの人のせいなの。まったく、もっと他に人いるのにどうしてよりによって自分だったのかまったく理解できない。

「それなら、次は私が自己紹介します。」

私は、アイリーン・シルバー。この国の第一皇女です。アンのって呼んでね」

「次は、私だ。ジャステイーン・シルバー。第二皇女だ。ジャスと呼んでくれ」

「私は、ミーシャ・シルバーです。第三皇女です。ミーシャと呼んでください」

「私は、先ほどもしましたが改めて。ステファニー・シルバーです。第四皇女です。ステフと呼んでください」

次々と王家の人達が自己紹介してくれた。

「次は、私、あなたをこの国に召喚した巫女のヴィオラ・マクシムです。ヴィーと呼んでください」

「最後は私ですね。私は、ヘリアンツス・オルガ。リアと呼んでく

ださい」

あちら側の自己紹介が全員終わったのでこっちの番となった。みんなに注目されていてかなり恥ずかしい。

「私は、南涼です。どうか涼と呼んでください」

第十二話

「さて、自己紹介も終わったことからまずは何故涼をこの世界に召喚したか説明しよう。

この国は千五百年前に、初代女王となるマルガリータがこの地に魔王を封印したことから始まった。封印は成功したのだが年月がたつにつれ綻びてしまう。決まって百年に一度。そして、今年がその年になった。

マルガリータじたいが異世界の人間だとも言われていて、そして、マルガリータの異世界にいる子孫の誰かが召喚されているみたいだ。そして、今回は涼が召喚された」

いつきに長々と女王が説明してくれたんだけど、なんだか現実味がない、そして、何故よりによって自分なのかと。正直自分が勇者とか似合わないのがわかってるのにな。どうやったら断れるのか。

「ああ、涼には拒否権ないから、なにがなんでも魔王を再度封印してもらうぞ。私もこの国をこの国の民を守らねばならぬからな」

「そんなの、こっちには関係ないし。正直、この国の民なんてしたことじゃないんだ。何よりも自分が大事、早くもといった世界に戻せよな」

ちょっと興奮気味に話す私に女王が冷酷な言葉をかけた。

「我が命にそわぬのならそなたが泣いて懇願するまで拷問なりなんでもしようか。そこまでするほど我はこの国が大事なのだ」

第十三話

「落ち着いてください。心から救いたいと思っていただけなければ充分な力を手に入れられないのです。前にも女王にはお話したでしょう。ほんとうに。涼自らがこの国を守り救いたいと願ったときには前回と同じように魔王を封印出来るほどの力を手にいれることができるのですよ。」

それから、今は魔王の力が強まっているせい、か時空が安定しないため涼をもとの国に帰すことは難しいのです。

だから、取り敢えずこの国で過ごしてみてくださいませんか？少しでもこの国のことを知ってもらいたいのですが」

めんどくさいことは嫌いだから断りたいのだけどね。必死にお願いされると、ましてやこんなにも可愛いこのお願いに頷くなというほうが無理だよね。

「そうですね。あなたがそう言うのならこの国を知るのもいいですね。もしかすると私の考えを変える何かがあるかもしれませんからね」

「なら、涼には王立学院にでも入ってもらうか。ちなみに年はいくつだ」

こんな異世界にきてまで学校いかないといけないのか。

「今は一五歳ですよ」

「なら、我が娘ミーシャと同一年だな。それでは、涼の面倒はミーシャにまかせる事にするか。」

ミーシャよ涼のことをお願いしてもよいかの？」

「あっ、はいわかりました。

涼、これからお願いしますね」

「こちらこそ、どうかお願いします」

「まあ、まだ学院は休み期間で開始までしばらくあるから王都でも観光してみればよい。そなたの国にはないものもたくさんあると思うぞ。

それと、フランに魔術の練習をしてもらえ。たぶん、まもなく涼に、魔力が現れだす暴走させないようにしっかり指導してもらうのだ。

そういうことでフラン頼むぞ」

「はい、わかりました。ミーシャ様のちほど涼の日程表を作りますよう」

「そうですね。以外とすることがありますので」

などと話しは進んでいった。本人はまったくついていけないのだけど。

第十四話

とりあえず、今日夕方からパーティーを開くのでお披露目はその時に
するからそれまでは自由にしていいていいとのことになった。

さっそく私は、同い年というミーシャと仲良くなりたかったのでお
城の案内を頼もうと思う。ちょっと人見知り気味なのでかなり勇気
がいる。

「あの、ミーシャこのあと予定がなかったらちよっとお城の案内を
してもらいたいのですが」

「ええいいですよ。今日は何も予定がなかったのです。それと、無理
に敬語を使わなくていいですから普通に話してください」

「いやあ、王族っていうと偉い人達だからちよっと緊張しちゃっ
てね。まあ、正直、敬語とか苦手だから普通に話させてもらおうよ」

「ええ、それでかまいません。

それより、どこから案内しましょうか。城はとても広いので
ゆっくり時間をかけて案内しますね」

「全部、ミーシャにまかせるよ。まったくわかんないからね」

今日中に回れなくても女王が言うには学院が始まるまで一月以上あ
るらしい夏休みみたいなものだ。だから、ゆっくりじっくりこの城
を見学しよう。後は街にも行ってみたいな。

第十五話

さて、どこから案内しましょうか。そんなことを考えてると声が聞こえた。

「今から模擬戦だ。順番に私にかかってこい。」

これはジャス姉さんの声だね。さっそく仕事してるんだ。よしっ、まずはジャス姉さんのところにいきましょう。

「涼、まずはジャス姉さんのところにいきましょう。剣術など興味ないですか？」

「あるよ。私は、向こうの世界で剣術習ってたんだよね。それなりに強いんだよ」

「それなら、よかった。では、さっそく移動しましょう」

そう言って、私たちはジャスがいる練習場に移動した。

「ジャス姉さん、少し見学してもいいですか？涼が剣術に興味あるみたいで。」

「ああ、構わない。怪我しないように離れてみているようにな。」

「はい、わかりました」

そうやって私たちは離れた場所に座って見学することにした。

それにしても、どうして一国の皇女が近衛なんかにいるのかまったくわかんないなあ。

「なあ、ミーシャどうしてジャスは近衛なんてやってるの？ かりにも、皇女がする職業ではないような・・・」

「そうですね。たしかにジャス姉さんが近衛に入ると言った時は母はかなり反対しました。でも、ジャス姉さんの意志がはかなり強かったのです。この国をそしてこの国の民を守りたいとかなり真剣に母と話していました。そうして、ついに母が折れたのです。そこまでの思いがあるのならと。」

「へえ、なんか大変だね。まあ気持ちわかるなあ」

家の重圧なら自分も感じたことがある自分はそれに耐えきれなくて逃げてるだけだけどジャスはきちんと向き合って自分で決着つけたんだね。

「涼、ジャス姉さんが呼んでいますけど」

なんか向こうでジャスで手招きして私を呼んでるようなんですけど、なんかめんどくさいことになりそうだな。

第十六話

私は、嫌々ながらジャスの方に近付いていった。

「ジャス、何かよう？」

「涼、剣術に興味あるなら多少は経験者か？」

「まあ、護身程度には習っていただけだよ」

「それなら、ちょっと涼の腕前をみるために手合わせしよう。どうせ、これから涼の剣術を教えるようになったし。これからの方針のためにもな」

ああ、めんどくさいことになった。剣術に興味あるなんて言わなければよかったよ。でもどうせ後でしないといけないんだろから良しとしておくか。適当にやって早く切り上げよう。

「まあ、いいけどジャスの相手なんてならないからあつというまに負けちゃうよ」

「今回は試合じゃない。あくまでも腕試しだよ。涼がどれくらいやるかの。」

さて、とりあえず軽く準備運動して体があったまったら中央にきてくれ。」

「了解しました」

ということで、まずは簡単なストレッチでもしようかね。

もくもくと体を動かし少し慣れてきたら剣をかりて素振りの練習を
してからジャスのいる中央のどこまでいどうした。

第十七話

「もう、準備はいいのか？」

「大丈夫、大丈夫」

「それなら、始めよう。審判は副隊長のシャインにやってもらう。シャイン頼むぞ」

「はい、わかりました。それでは、両者ともに定位置についてください」

なんか凄いことになってない。観客増えてるし女王まで観戦してるよ。まずいな、非常にめんどうだ。とっとと終わらせてお腹も空いたし昼食に連れていってもらおうとしようかな。

「両者、構えて。

始め！！！！

」

シャインの号令と共に私は、ジャスに突撃した。とりあえず先手必勝というやつだ。

だが、やはりプロには勝てないかなあっさりとかわされた。久しぶりの試合なので勘が鈍ってるよ。

なんとか、ジャスの攻めをかわすので精一杯だけどジャスの隙をついて狙えばいけそうなんだけどめんどくさいよね。どうやって終わらせようか。

「涼、考え事などやめて打ってきてみたらどうだ。まだまだ、本気などだしてないだろ。手を抜いてるのがまるわかりだぞ。本気ださずに負けでもしたらしごきまくるからな」

やばい、やっぱりプロだ考えが読まれてる。仕方がないこうなったら真面目にやるしかないか。でも、たぶん勝てちゃうよ。そうなたらそうなたでめんどくさそうなんだよね。

よしっ、こうなったら真面目に戦って最後油断して隙を作って負けよう作戦にしよう。演技力がものを言うから大変だ。

第十八話

それでは、始めようか。

「それじゃ、行くよ。」

「ヤアッ！」

まずはジャスの正面からうちに入った。まあ簡単にかわされるよね。

「なんと、小癪な。次は、当てるよ。」

「ヤアッ！！」

今度はジャスの背後に回り込み一撃を打った。

「甘いぞ、そんなのでは私に一撃も打つことができないぞ」

そういうと今度はジャスがどんどん打ってきた。アマチュア相手にプロが本気でやるのはどうなんですかと言いたいぐらいにジャスは打ってきた。

もう限界だ。次のターンでわざと隙を作って打たせよう。

「負けてなるものか、行くぞ！」

さっきより一段と素早くジャスに近付いていった。横から一撃を打った。脇はがらあきだよ。よし、ジャスよ打ってこい。痛いのは嫌いだけどこれはしょうがない。

「涼、脇ががらあきだぞ。わざとなのか」

ジャスが私の脇に打ち込んでそれでやっと終了した。

「一本、それまで!!」

ああ、やっと終わった。でも、これから剣術も習わないといけないのか。疲れるこの世界これならむこうのがまだましだよ。

「涼、今のはわざと隙を作ったな。」

「そんなことあるわけじゃないですか。そんなこと考える余裕もなかったんですから」

やばい、テンパり過ぎた何故か敬語になってるし怪しすぎだよね。

「そういうことにしといてやる。次回からの稽古を楽しみにしておくことだな」

終わったな。こんなことなら真面目にしておいたほうがよかったよ。

第十九話

なんか散々な時間だったな。おなか空いたしミーシャに食堂にでも連れていつてもらいましようかね。

「涼、お疲れ様です。」

ジャス姉さん、怒らせると大変ですから次からはちゃんとしたほうがいいですからね」

「うん。わかってるよ。これからは真面目に取り組めます。」

それより、ちょっとおなか空いたし昼食にでもしてほしいなどか思っているんだけど」

「そうですね、ちょっと昼食には早い時間ですが厨房にいつて軽食作ってもらいましようか」

「そうしましょう、そうしましょう　！！」

やった！やっにご飯だ。そういえば朝から何も食べてないよな。それなら、おなかも空くはずだよな。

でも、この国の食事と向こうの世界の食事と一緒になんだろうか。これは、かなり重要だよな。ただでさえ好き嫌い激しいから食べれるものあるかな。

「お昼はサンドイッチでも作ってもらいましようか？」

涼は好きな料理はなんですか？ここで作れるものなら今度作ってもらえますよ。」

「とくにこれが好きっていうのはないんだよね。食にも執着心ないからね。」

嫌いなものならありすぎてこまるかも。

だから、こっちで食べれるやつあるか探さない」と

「ダメですよ！　　　好き嫌いなくちゃんとバランスよく食べないと。」

ちなみに、何がダメなんですか？」

「野菜類とか生物とか辛いものとか酸っぱいものとかとくにダメだね。」

「野菜なんて一番栄養とれるものなんですよ。ちやうどいい機会ですから、これから涼の食の改善をしていきましょう。」

「お母さんみたいなこといわないでよ。それ、さんざん言われてることだし。」

でも、やっぱり食べたいものだけ食べて生きていきたいよ」

急に後ろから声かけられた。

「それでは、ダメですよ！

今はいいかもしれませんがのちのちバランスがとれていない生活が涼の体を壊していくんですよ。」

「アン姉さん、ちやうど今から厨房にいくとこだったの。」

「それなら、今から私もいくから一緒にいきましょ。」

お腹が空いたんでしょ？ サンドイッチでめ作ってあげるはお
野菜たっぷり使ってね♪」

第二十話

三人で話しているうちにあっというまに厨房についた。

「それじゃ、私は着替えてくるからちよつとまっててね」

そういつてアンは厨房の奥の部屋に入っていた。

「皇女さまでも料理するんだね。」

「アン姉さん、厨房で働いていますからね。まだまだ厨房長にはかなわないみたいですけどかなりの腕前なんですよ。」

「えっ、でもなんでかりにも一国の皇女が料理人なんてやってるの？」

「まあ、ジャス姉さんと同じでアン姉さんは料理で人を笑顔にしたいみたいです。」

アン姉さんが料理人になるっていうときはお母様との争いは凄かったですよ。やはり、一応アン姉さんは長女ですからね、お母様は後を継がせたかったんだとおもうんですよ。でも、やはり最後は意志を尊重してやりたいことをしなさいってことで決着が着いたんですけどね」

「上二人が後を継がないとなるとミーシャかステフが次期女王なの？」

「ステフはフランみたいな魔術師になりたいみたいで実質私が女王候補なんです」

「ミーシャはなにかやりたいことなかったの？」

「特にはないんです。だから、まあいいかなって軽い気持ちなんですよ。それではだめなんだとわかってるんですけど。どうしても、まだまだ将来のことなんて頭にはないですよね。

もし、アン姉さんが後を継いで女王になってたら私は、いったい何をしたらいいんだろうとか余計な考えばかり浮かんでくるんです」

「こんな大きな国を抱えていかなきゃいけないるんだもんね。大勢の民のことも考えないといけないし他国との関係も考えないといけないしかなりの重圧だよな。

でも、最後の選択を決めるのはあくまでもミーシャ自信だからその事を忘れないようにね。無責任なことはできない、やれないと思うなら初めからやらなければいいんだよ。」

「でも、私がやらなければお母様だって困ると思う。」

「だからといって、やりたくもない人間に後を継がせようなんて思わないと思うよ。国にも民にもよくないことだし、それにやっぱり自分の子供にも幸せになってもらいたいのが親心なんだから無理言わないと思うんだけどな」

「まだまだ先のことだろうから焦らず女王の仕事についてとお母様と話していきたいです。それから、しっかり自分の将来のことを考えます」

「そうしなよ！今すぐの話じゃないだろうから自分の思うがままにやってみたらいい」

自分の道ぐらい自分で切り開いてみたいもんだよね。親がひいたレールの上を走るのは簡単だろうけどそれじゃいやなんだよ。やらされてるかんがあるから。

「二人ともお待ちませ。サンドイッチ出来たわよ」

やった、今日はじめてのご飯だ♪♪

第二十一話

「ありがとう、アン。これは美味しそうだよね。でも、野菜たっぷりだね」

「そうよ♪やっぱり涼の体のことを考えて作ったのよ。だから、残さないで食べてね。でも、ほんとに無理なら食べなくていいからね。ゆっくり苦手な物を克服したらいいからね。」

「うん、わかりましたなるべく頑張ってみます」

食堂にいつてご飯の準備をしてもらった。

「それでは、いただきます」

まずは、玉子から。うん、美味しいこれはいい。

次は、レタスとハムこれも食べれそう。美味しい♪

問題は、なんかピーマンぽいのか人参とか入ってるやつだね。何故サンドイッチにピーマンとか入ってるの普通ないよね。こっちは普通なのかな。

でも、こっちをニコニコ笑顔で見てるアンを見ると食べないといけないよね。

よしっ、ここは勇気をだして一口パクっと。

あつ、なんか食べれる甘くて美味しいかな。

「よかった。食べれたみたいね。これからいろいろ試してみましようね♪」

「お願いします。

サンドイッチ美味しかったです」

和やかに三人で話しているとアンは夕方のパーティーの準備があるからということで席をたった。

これからどうしようかなと考えてたらメイドさんが話かけてきた。

「ミーシャ様、メイド長から涼様の部屋の準備ができたとのことです」

「わかりました。案内たのみます」

「はい、ではこちらに」

「涼、今からお城にいるあいだに滞在する部屋に案内しますね。」

「ああ、よろしくね」

私たちはメイドさんの案内で用意された部屋にいった。

まあ、これはなんというかゴージャスな部屋ですよ。無駄に広いなんか落ち着かないよ。ベットもいったい何人で寝るのってぐらい広いし、隅っこにいたほうが安心できるよ。

第二十二話

「ミーシャ様、今夜のパーティーの涼様のドレスはどうでしょうか。そろそろ用意しないと時間までに間に合いそうにないのですが」

「そうですね。涼もジャス姉さんのようにドレスは着ないと思うのでとりあえずジャス姉さんに服を一着借りてきてください。それを、涼に合わせて仕立て直してください。」

「わかりました。ただいま用意いたしますのでしばらくお待ちください」

そういうとメイドさんが部屋をでていった。

「涼、座ってまってましよう。服がそろったら一度試着してみてくださいね。」

「わかった。」

でも、やっぱりパーティーなんてめんどくさいな」

「さぼったりしたらだめですからね。さすがにパーティーの主演がいなくなったらみんな困ってしまいますから」

「了解しましたよ」

パーティーね、昔から人がたくさん集まるところって嫌いなんだよね。何か企んで寄ってくる人間多いからな。今度だってきつと勇者に近付いて王家に関わりを持とうとしようとかそんな考えの人間多いはずだよな。きちんと見極めないと。そういうのは得意になったから

助かるよな。

今夜のパーティーの話をミーシャと話していたらさっき部屋から出ていったメイドさんと他何人かが大きな荷物を抱えて部屋に入ってきた。

「ミーシャ様、一応これだけ借りてきました。どれがいいかわかりませんので見てもらっていいでしょうか？」

「わかりました。さあ、涼こっちにきて一緒に決めましょう。順番に着てみてください」

「なんか、派手だな。一応着てみるよ。

ミーシャが選んでね。自分ではこういうの決められないから」

「はい♪涼に一番似合うのを選びますね。

さあ、涼に合う色はなにかしら♪」

「ミーシャ様、涼様は漆黒の髪と瞳をお持ちですのでそれに合わせて黒を基調とした色合いの服などいかがでしょうか？」

「そうよね。まずはそれからいきましょうか。」

それからなん着も着せられて私は、疲れはてた。でも、なんとか着る服が決まった。

「とても、涼に合うわ♪みんなの反応が楽しみ。

絶対お母様の趣味にあってるよね。気を付けてね」

いった何を気を付けたらいいのやら。困ったものですな。

第二十三話

まだまだお城の中を見学したいのだけど、もう疲れたので少し休みたいと言って今は部屋に一人でいる。

朝からいろいろあったよな。目覚めたら異世界だとか勇者の末裔だとか魔王退治だとかいったいどれだけびっくりさせられることがあるんだろうかとドキドキしてる。以外と自分はこの状況を楽しんでいるんだよね。

前の世界にそんなに強く帰りたいと思う気持ちが薄いような気がする今はこっちのほうがなんとなく合うような。

それだけ向こうが嫌だったのかな、まあ、ちょっと逃げたい気持ちがあったから尚更なのかもしれない。

そんなことを考えたらいつしか寝てしまったらしい。

数時間後、涼は部屋をノックする音で目が覚めた。

「誰、鍵は開いてるし入っていいよ。」

「失礼します。」

涼様、そろそろパーティーの着替えの時間になりました。服も揃いましたので、用意します。先にお風呂に入ってはどうか。目が覚めると思いますので。」

「そうしようかな。すぐ入れる？」

「はい。お湯の方は用意できていますので着替えなどは後でお持ち

しますので何ももたないでお入りください」

「うん。わかった。よろしくね」

少し寝ぼけてるのでシャキッと目をさまさせるためにお風呂に入ることにした。

お風呂もかなり凄いこんなのが各部屋についてるんだからこの国って以外とお金があるんだね。まあ、ないよりあるほうがいいんだから栄えてるのはいいこと。

お風呂に入りスッキリして出ると一応下着らしいものとバスローブが置いてあったのでとりあえずそれをきて部屋に戻った。

部屋には服一式綺麗に並べられていた。メイドさんたちは仕事が早いね。

「みんなありがとね♪」

「いえ、仕事ですし、涼様にきていただくとも考えるだけでも嬉しく思います」

「そんなこと言ってもらえると嬉しいね。」

よしっ、それでは着替えようかな♪」

「お手伝いいたします！」

「よろしく！」

メイドさんたちに手伝ってもらってなんとかパーティーに参加でき

るぐらいに変身することができた。

メイドさんたちの視線を一身にあつめているのです。ちょっと怖い
です。

メイドさんたちに観察されていると、ミーシャがやってきた。彼女
もかなり綺麗になってるよ。

第二十四話

「涼、着替えはすみましたか？」

「あつ、ミーシャ。」

「なんとか、メイドさんと一緒に着替えたよ。どうかな、似合ってるかな？」

「完璧ですね。私たちが一生懸命考えて選んだかいがありました。よく似合ってますね♪」

「ありがとう。なんだか嬉しいね。」

「ミーシャも凄く綺麗だよ。そんなだと、いろいろ男の人が寄ってきて大変そうだね」

「そうになったら、涼が助けてくださいね。私は、ちょっと、男のかが苦手なんです。うまく話せなくなるし困るんです」

「うん。ミーシャが困らないように側にいるからね！」

「ありがとう。期待しますからね。」

あと、知らない人には着いていかないように！」

「そんなのわかってるよ。小さな子供じゃないんだから大丈夫だよ。」

「では、綺麗で可愛い女の人に誘われたらどうしますか？ なんだか、涼ならついていきそうで心配になってしまいます」

「なんだか、ちょっと否定できない自分がいるよ。

でも、大丈夫だよ。気を付けるから」

ほんとに大丈夫でしょうか。ちょっと、涼は綺麗な女の人に弱いみたいですからほんとに心配になります。

「できるだけ一人にならないようにしてくださいね。まあ、なるべく私が側にいるようにしますから」

「わかりました！」

パーティーなんてめんどくさいな、少し寝たけどやっぱりちょっと、眠いんだよね。でも、もうすぐ始まっちゃうしねれないよね。

まあ、少し楽しみだよね。いろいろな人に会えるチャンスだしどれだけ綺麗なお姉様にあえるかな。

またしても、部屋をノックする音が聞こえた。今度は誰かな♪

第二十五話

「涼、ミーシャ姉、もう用意できてますか？」

「おっ！ステフずいぶん可愛くなったね。ドレスの色もよく合ってるしほんとに可愛いね。」

「やっぱり、妹っていいよね。」

ほんとに可愛いな、ちよつと妹達に会いたくなつたかな。ここにいるあいだステフを妹みたいに可愛がろうかな♪

「涼、ありがと。でも、そんなにほめられるとちよつと恥ずかしいです」

ちよつと顔を赤くして俯くステフ。

やばい、マジで可愛いぞ。なんだこの可愛さ犯罪級だな変な人にはきをつけないと。

「もう、涼はステフばかりみて私には気がつかないのかしら？」

ステフのうしろからフランがでてきた。まったく気が付かなかったよ。

でも、やっぱりフランってグラマーなお姉様だよな。出るとこ出るしちよつと触ってみたいな♪

「触りたいなら触ってみる？」

「えっ、！いやいや、なんでわかった、じゃなくて別に触らないよ。ちよつと興味あるけど！」

「だから、触ってみればいいじゃない別に減るもんじゃないし逆に増えるかもだしね♪」

えっ、じゃちよつとぐらい触ってみても。だめだ、横でミーシャの視線が半端なく怖いです。やり過ぎたでしょうか？誰か助けて。

「涼は大きな人のほうが好きなんですか？」

「いやいやそんなことはないよ。」

「それならいいんですけど。もう少しまってくれたらお母様ぐらいにはなるはずです」

「だから、胸の大きさなんて関係ないからね。」

別に大きかろうが小さかろうがいいんだよね。

なんで、こんな会話してるんだっけ。パーティー始まる前に疲れたよ。

「そういえば、パーティーっていつからもうすぐ始まるの？」

「あと、30分ぐらいで会場のほうに移動していただきます。もうしばらくお待ちください」

「はい、わかった！」

時間がくるまでまたみんなで話してメイドさんが呼びに来たのでみんなで移動することにした。

第二十六話

さてと、パーティー会場に移動したんだけどなんか凄いね。向こうの世界でもパーティーはあったんだけど向こうのとは比べ物にならないくらいの規模だよ。

こういうのをみるとほんとにファンタジーな世界にきたんだなと思
い知らされるよ。

「涼、どうしましたか？気分でも悪いんですか？」

考えこととしてミーシャを心配させたみたいだ。悪いことしたかな。

「いやいや、そんなことないよ。ただ、こんな規模なパーティーなんて参加するのは初めてだからかな、ちょっと緊張しているみたいなんだよね！」

「それなら、いいんですけど。少しでも体調が悪いなと思ったらすぐに言ってくださいよ！」

「わかった。心配してくれてありがと。場に慣れてしまえば大丈夫だから。」

まあ、この雰囲気になれてしまえばどうにかなるだろうね。

ちょっと、会場がザワザワしだいしたな。どうかしたのかな？

「涼、まもなく女王のお母様が入場するみたいです。軽く頭を下げてくださいね。顔をあげていいとお母様が言うまであげてはいけま

せんよ!」

「えっ、そんなお決まりごとがあるんだね。ミーシャみながらするよ」

「そうですね。そうしてください」

すぐに、女王の入場の音が鳴らされて女王が入場してきた。

みんながいっせいに頭を下げた。私ももちろん真似をしてさげた。

何分ぐらいしたんだろうか。女王が席の前にやってきたみたいだ。

「みななもの頭をあげよ。」

みんな下げていた頭をあげた。

「今日は我が国、いやこの世界をすくうであろう勇者の召喚に成功した。」

その勇者のお披露目に集まっていたいた。

涼、こちらに来てくれ!」

えっ、こんなところで自己紹介とかするの無理だよ。緊張で何も喋れないよ。みんなガツカリだよ。どうしようかな?

「涼、とりあえずお母様のところにいつてください」

「行かなきゃ駄目だよ。」

わかった、行ってくるよ」

なんとか震える足で階段を登って女王のところまでいった。

「みなものの、この者が勇者じゃ。

きっと世界を救ってくれるであろう者だ。

涼、みんなに挨拶を。」

なんにも、考えてないよ。女王も無茶ぶりするよな。

「ええーと、ただいまご紹介にあずかりました。南涼です。

正直な話をしますが。まだ、自分が勇者だなんて信じれていません。自分なんか世界なんて救えるのか自分が世界を救うなんて想像できないんですよ。

もしかしたら自分が死んでしまうかもしれないのに勇者になんてならないといけないのかと悩んでいます。

まだ、私は、勇者ではありません。自分がまだ、勇者になることに納得していないからです。

だから、まずはこの世界のことを知ってから考えようと思いますのでどうか暖かい目で見守っていてください。

きちんと自分に向き合うことで正しい答えをみつけないと思っています」

とりあえず自分の考えをいって見た。いいたいことは言えたと思うからいいよね。

「どういう者かわかったかな。とりあえず勇者候補だと思ってくれ。まあ、とりあえずパーティーの始まりじゃ。存分に楽しんでくれ♪」
パーティーが始まった。みんなとお喋りタイムだね。綺麗なお姉様はいるかな。

「涼、ずいぶんとその服似合っておるな、私と一緒に夜は過ごすか？」

ミーシャが気を付けてって言ったのはこのことだったのか！無理だよ、女王はちよっと年齢がね。

その前に友達のお母さんとかないよね。

「いや、せつかくのお誘いなんです。自分にはちよっと女王にてを出すの、えっと、無理です。ごめんなさい！」

断って頭を下げた。無理なものは無理だよ。

ふと、女王の顔をみると笑っていた。

「ふふっ、冗談だ。今はな。」

いやいや、いくら時間がたってもお相手は無理ですから。

「まあ、よい、涼も下にいって楽しんできなさい。」

ここは心臓に悪い場所だ。早く退散しなくては。ミーシャのところに

戻ろう。

「ああ、それでは私は、これで」

軽く会釈をして、ミーシャのところに帰った。なんかいつきに疲れたよ。

もう退場してもいいですかね。

「駄目に決まってるでしょ。パーティーは今からよ。いろいろな人が挨拶にくるだろうからきちんと対応するのよ！」

フランはエスパーですかんで、考えがばれるんだろうね。

「あなたの考えなんてバレバレなのよ。」

まあ、いいからシャキツとしなさいよ。今からが大変なんだから」

嫌だなあ、綺麗な女の人ばかりなら問題ないんだけどね。

第二十七話

ミーシャたちと美味しいご飯を食べているとフランがいった通りにこの国の貴族の人たちやら軍の人たちが自己紹介にやってきた。

基本あんまり人には関心がないので名前なんて覚えられないよな。

ただ、話を聞いて軽く受け答えをしているとミーシャが一人の綺麗な女の人をつれてきた。

「涼、学院長が挨拶をしたいそうです！」

おっ！その綺麗な女の人ひ学院長か。ということは学院に行けば毎日あえるということかな。

「学院長は忙しい人なんですよ。毎日学院に居るとはかぎりませんよ！」

「なんでわかった？」

「顔にでてましたよ。」

そんなにわかりやすい顔していたのかだからフランにもわかってしまったのかな？

「それより、きちんと挨拶をしてください。

では、学院長どうぞ。」

綺麗な女の方はミーシャの前にでてきて、私に頭を下げた。

私も急いで頭を下げた。

「初めまして、私が涼さまが通うことになるシャイン王立学院の学院長でシルヴィア・アールンと申します。いろいろとわからないことがあると思いますが手助けできるように教員一同頑張りますのでよろしく願います」

なんか、ややこしいな先生達にまで畏まれたんじゃ正直やりにくいよな、ここはちよつといっておかないと。

「えっと、学院長さん、私のことはただの一生徒として扱ってもらいたいですけど。なんか、依怙贖罪されてるみたいでみんなとの壁ができたりしたらいやだし。

あと、それと様なんてつけなくていいですから。

わからないことは教えを請いにいきますのでそのときにはどうかお願いします」

女王から紹介があつた勇者様はほんとにごく普通の女の子でした。

かなり、近衛の正装服が似合っていて回りの女の人たちの目は彼女に集中していました。

でも、私は、教師としての立場から考えるとこんな年端もいらない子供に世界を託さなければいけないのかと思うとあまりにも理不尽なはなしだとおもいました。

急に異世界から連れてこられて家族や学友とも離れとても寂しいだろうと思います。

しかし、彼女は人を思いやることができる優しい子なのでしょう。人の気持ちには敏感に対応できます。だからこそ、心配にはなりません考えが流されてしまわないか。

たぶん、彼女はほんとにこの世界が危ないのだとしたら自分の命を省みることはしないで救おうとしてしまうような気がします。

でも、彼女はまだまだ15歳の小さな子供守られていい年齢です。だから、教員一同で話し合い決めたのです。出来る限りのことはしてあげて学院にいるあいだは見守り慈しもうと。後悔はしたくない魔王退治にいくときも最大限の助けをしようと。

どうか、神よこの小さく可憐なこの子に祝福を！

「わかりまして、公式の場がい学院にいるあいだは一生徒としてあつかいますね。

どうぞ、何かありましたら誰にでもいいのでお尋ねください」

そう言って学院長は綺麗なお辞儀をした。

「まあ、なにかあったらよろしくお願いします。

あと、敬語じゃなくていいですから、なんか年上の人からそんな風に話されるのちょっと変な感じなんで」

「はい。わかりました。

これから、頑張っていきましょう！」

そう言って学院長は他にも挨拶にいかないといけないので私たちと離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6105y/>

夢か現実か??

2011年12月19日13時50分発行